

## クレール・ルメルシエ、クレール・ザルク「絶頂期から危機までの数量的歴史学」

Claire Lemerrier and Claire Zalc, “Quantitative History from Peak to Crisis”, *Quantitative Methods in the Humanities : An Introduction*, University of Virginia Press, 2019, pp. 7-27.

### 紹介

同論考は、人文科学における数量的研究入門の序論である。1970 年代以降、数量的方法への批判がイタリアのミクロストリアを筆頭に生じた。著者らは、そうした批判を真剣に受け止めたうえで新たな数量的研究の方法と利点について説明し、質的と量的という現在の不幸な分業を克服しようとする。第四回の先端研研究会のレジュメも参照のこと。

- ・1903 年、フランスの若き社会学者フランソワ・シミアンは、今日でも科学的歴史学の発明者と見なされているシャルル・ヴィクトル・ラングロアとシャルル・セニョボスを批判した。シミアンは、彼らの方法が主観的であって概念的な規律が欠けていると主張し、エミール・デュルケムがおこなったような統計の厳密さと対比させた。このエピソードは数量的歴史学の始まりを印づけており、歴史学と社会学の関係性の基調となっている。

### ○「新しい歴史学」が数量的であった時代(pp. 7-10)

- ・シミアン—セニョボス論争の構図は、その後フランスだけでなく、イギリス、アメリカなどでしばしば繰り返されることになった。
- ・1929 年に『アナール』が創刊された。この雑誌は当初、主流の歴史学と対立していたが、第二次世界大戦後、特に 1960 年代にアメリカにおいて歴史学の主流派の基調となった。
- ・この新しい雑誌は、経済的、社会的、比較史的方法を採ること、個人よりも集団（特に自分たちの歴史を書かない集団）を研究対象にすることを提案した。このことは、新たな資料や、社会学、地理学、人口学、経済学からしばしば借用した新たな方法の使用を意味していた。「新しい社会史」を支持する同じような革命が、1960 年代に多くの国で起こり、「国際的な取り組み」(international effort)となっていた。
- ・アメリカにおける「新しい社会史家」たちは、自分たちを歴史学の伝統に対する反逆者だと考えていた。政治学と社会学は、方法を借用すべき重要な源泉であったため、彼らは自分たちの新しい専門分野を「社会科学的歴史学」(social science history)と呼ぶことになった。社会科学的歴史学会(SSHA)は 1974 年に設立された。
- ・英語で書かれた主要な歴史学雑誌においては、数量的研究の割合は 1967 年に 10%であ

ったのに対し、1977年には20%になった。歴史記述の新しい方法が定着し、その結果、歴史学の雑誌や書籍の体裁も変化した。表、図、地図、さらには生の数字が何列にもわたって掲載されるようになった。これは社会史に限ったことではなかった。

- ・アメリカでは、地理学、政治学、経済学などの方法を借用して、「新しい政治史」(new political history)、「新しい経済史」(new economic history)を提唱する新世代の研究者たちが現れた。「新しい経済史家」は、自分たちの専門を「クリオメトリクス」と呼んでいた。つまり、計量経済学を歴史的なデータに適用することである。彼らは、二冊の本<sup>1</sup>のおかげで「新しい歴史家」たちのうちでもっとも目立つ存在だった。
- ・アメリカの外では、政治史は1980年代にいたるまで伝統的な方法を使い続けており、〔「新しい政治史家」であるリー・ベンソンやアラン・ボーグが行ったような〕投票の数量的分析を行うのは政治学部に限られていた。「クリオメトリクス」はアメリカから他国の経済学部へと広がっていき、歴史学部からは経済史家がほとんどいなくなってしまった。「新しい社会史」はさらに広く普及していた。
- ・数量的な志向を持つ「新しい歴史家」たちは、「新しい社会史家」から「新しい経済史家」にいたるまで、非常に異なる政治性を有していた。しかし、彼らはみな、社会科学における実証主義を目指そうとするより広範で(国際的な)潮流の一部を担っていたのである。特定の資料、およびそれらに取り組む方法は、この実証主義の理想と結びついており、今でも数量化と本質的に結びついたものと見なされることがよくある。

### ○構造と長期の傾向を明らかにする系列(pp. 10-12)

- ・「新しい歴史家」にとって、数量化は「長期的な変化の歴史的パターンに関する大きな問い」に取り組むための方法であった。「長期持続」(longue durée)という言葉が強調されたが、これはフェルナン・ブローデルによって作られた言葉で、非常にゆっくりと変化するコンテクスト(気候や相続の習慣など)を意味していた。
- ・人文科学と社会科学においてもっと重要なキーワードとなったのが「構造」である。この考え方は、細部があまり重要ではないということを示唆していた。個々の人間の行為もまたあまり重要ではなく、「人間なき歴史」(history without humans)を宣伝するまでになった。この「構造」概念と「系列」への注目によって、長期的な傾向(secular trends)、主要な局面(major phase)、「偶然的な出来事」(accidents)の微妙な相互関係を記述することが可能になった。

---

<sup>1</sup> Robert W. Fogel, *Railroads and American Economic Growth: Essays in Economic History*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1964; Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, *Time on the Cross: The Economics of American Negro Slavery*, Boston: Little, Brown, 1974 [R・W・フォーゲル、S・L・エンガマン(田口芳弘、榊原胖夫、渋谷昭彦訳『苦難のとき——アメリカ・ニグロ奴隷制の経済学』創文社、1981年) ] .

- ・「新しい歴史家」たちは歴史資料の中にデータの「系列」を探した。彼らは 20 世紀の統計学に自信を持ち、系列を後ろ向きに延長しようとし、あたかも資料の著者が歴史家が現代の統計学者であったかのように資料の「信頼性」をランク付けしたのであった。資料はより大量にあり、均質で、現代のカテゴリーに適したものであればあるほどよい。系列は「直接的、体系的、繰り返し作成され、長期的、比較可能」でなければならず、資料が持つその他の特徴は修正されるべき問題であるとみなされた。
- ・フランスの経済史においては、1973 年に系列的な研究の出版がピークに達した。系列的な資料を用いたモノグラフや、特に学位論文に関しては、おそらく 1980 年代にピークが訪れた。

### ○学位論文と共同研究(pp. 13-14)

- ・「新しい歴史学」が主流になれたのは、歴史研究が組織される仕方が変化したからであった。「新しい歴史学」はより一般的に分業を促し、資料の読み込みを行なう研究助手、パンチカードの操作者、地図製作者、その他の専門家を利用するようになった。博士課程の学生数が増えるにつれて、例えばアナールの歴史家エルネスト・ラブルースは、フランスを地域や部門に分け、同一の統計的装置を使って研究するようにそれぞれの場所を博士課程の学生たちに割り当てた。こうしたきわめてヒエラルキー的に組織された集団的研究は、「ハードサイエンス」のモデルに従って設計されていた。
- ・しかしながら、多くの系列〔の収集〕や分析が完了することはなかった。データやその解釈に必要な情報は、コンピュータの世代交代に伴いしばしば失われてきたのである。ローレンス・ストーンは新しい方法に失望を表明した最初の歴史家たちの一人である。「こうしたプロジェクトは、もっとも気前良く資金を投入され、大勢の雇い入れ研究者を使って膨大な量のデータを集めることにもっとも野心的で、最先端のコンピュータ技術を使ってもっとも科学的に処理され、数学的にもっとも洗練された形で発表されるけれども、まさにこれらが、今までのところ、もっとも期待外れなものであることが判明してきたのである」<sup>2</sup>。
- ・こうした「ビッグサイエンス」は知的に還元的であるばかりか、日々の実践においても極めて官僚的であったことが、数量的歴史学の先駆者たちを幻滅させることにつながった。彼らの多くは、政治的にはフォーディズムに、つまり組立ライン生産に反対していた。しかし、社会科学研究において支配的な実践は、それ自体がフォーディズム的であると解釈できたのである。

---

<sup>2</sup> Lawrence Stone, “The Revival of Narrative: Reflections on a New Old History”, *Past & Present*, 85, 1979, p. 13〔引用は次の邦訳による。阪本尚文・霜田洋祐訳「物語りの復活 ― 新たな古い歴史学についての考察(1)」『行政社会論集』27 巻、2015 年、180 頁〕。

### ○幻滅の時期(pp. 14-15)

- ・「明日の歴史家はプログラマーになるか、存在しないかだ」と、エマニュエル・ル・ロワ＝ラデュリは1968年に書いた。しかし、それから7年後に、彼は一つの村の25人の異端の裁判に基づくモノグラフを書いたことで本当の意味で有名になったのである。数量的歴史研究の生産がピークに達していた1970年代、新しい方法を開拓したまさにその世代において、幻滅が始まったのである。

### ○数量化の見返りの減少(pp. 15-16)

- ・幻滅の深さは、それ以前に抱いていた期待の大きさに対応していた。「新しい歴史家」の多くは、「もっとも洗練された技術を使って、自明なことを証明するか、あるいはありえそうもないことを証明したと主張している。・・・その結果、時に読みにくさと瑣末さという欠陥が結びついている」<sup>3</sup>。率直に言えば、数量的歴史家はしばしば人をうんざりさせる存在であり、彼ら自身もうんざりしていたのである。
- ・数量的方法の最盛期の過剰さと誤りがこうした不信感を生み出すことにつながった。この過剰さは、「歴史を書くには大量のデータを集めれば十分であり、ゼウスの頭からアテナが生まれたように、コンピュータから熟しきった結論が出てくるという確信」<sup>4</sup>から生じた。この誤りにはサンプリング技術に対する根深い無知も含まれている。この無知は歴史家が大量のデータ収集に熱中することにつながった。アンドレ・ジスベールは約6万人のガレー船奴隷の情報を集めたが、本来は1000人で十分だったのである<sup>5</sup>。
- ・逆説的だが、1980年代に、マイクロコンピュータの出現により歴史家が自分の手でデータを処理できるようになったまさにその時に、多くの人が数量化の見返りの減少や明らかな欺瞞を非難した。
- ・コンピュータが利用しやすくなったことで、部分的には他の方法との違いを目立たせるという目的で採用されたこの方法の価値が低下したのかもしれない。また、多くの歴史家は、専門家と仕事をする必要がもうなくなったのだから、データの適切な処理方法を自分で学ばなければならないことを忘れていたのである。
- ・1980年代の新自由主義経済政策により、ほとんどの国で歴史研究のプロジェクトに投じられる資金が減少し、博士課程の学生や技術者も枯渇してしまった。終身在職権を得たければ、学位論文は比較的短く自律的で読みやすくなければならない。
- ・もし、同じクオリティの議論、あるいは少なくとも読者を説得するに足る議論を、データ収集に多くの時間をかけることなく、結果を提示するためのスペースもあまり必要

---

<sup>3</sup> ibid.

<sup>4</sup> Gérard Béaur, “Âge critique ou âge de raison? Les dix ans d’Histoire & Mesure”, *Histoire & Mesure*, 11-1, 1996, pp. 7-17.

<sup>5</sup> André Zysberg, “Impact de l’informatique sur la recherche historique”, *Matériaux pour l’histoire de notre temps*, 10, 1987, pp. 35-37.

とせずに行うことが可能だとすれば、どうして質的な研究に取り組まないのだろうか。

- ・カルロ・ギンズブルグは、歴史家に対して「ガリレオ的パラダイム」を拒否し、「推論的パラダイム」(evidential paradigm)を支持するように促した<sup>6</sup>。推論的パラダイムの目的は、たとえ「脆弱な科学的基準」を採用してでも「重要な結果」を得ることであり、「強力な科学的基準を採用してつまらない結果」を得ることではなかった。

### ○個人と物語への回帰(pp. 17-19)

- ・1980年代の危機には他にも思想的な理由があった。数字や客観性への信頼が、ポストモダニズムという文脈の中で薄れていったのである。文化人類学やフェミニズム研究、ジェンダー研究などの書物は、「文化論的転回」を促した。
- ・アナクロニズムの濫用で長期の系列への信頼が損なわれたとすれば、出来事よりも長期的傾向を、例外よりも平均的人物を明らかにする統計への不満も高まっていった。特にイタリアのミクロストリア研究は、データの集合を扱う手続きに挑戦することで、数量的歴史家の重要な前提を覆した。イタリア人の研究は、その大部分がラブルース派の歴史学に対する批判であった。ラブルースとその追随者たちが不適切なカテゴリーを用いたというだけではない。イタリア人は異なるスケールで現象を観察することの重要性を指摘したのである。
- ・集合(aggregation)に関する学問的な議論は、より政治的な不満と密接に結びついていた。「新しい社会史」はもともと、大衆の歴史を書くために「歴史のない人びと」を正当な研究対象とすることを目指していたが、急進的な歴史家たちはもはやこの集合体(aggregate)の歴史を書くことに満足していなかった。
- ・彼らは「平均的な人間」だけでなく、あらゆるマイノリティへの関心を高め、個人の声と行為主体性を回復しようとしたのである。イギリスの社会史家たちは、数量化を常に拒んできたマルクス主義者であり、国境を越えてますます関心を集めるようになった。
- ・個人、物語、文化、政治、テキストへの回帰は、数量的なものに対立するとみなされるようになった。学問的に左派の歴史家の多くは、歴史的行為者の実際の経験や能力にもっと注意を払うことを選び、「人文科学」に近づき、「社会科学」からは遠ざかった。

### ○再生へ向けて？(p. 19)

- ・幻滅に陥ったり、かつて尊重されていたものの破壊を望まない人びとにとっては、探索すべき別の道が現在の歴史研究の学派の中に存在する。

---

<sup>6</sup> Carlo Ginzburg, "Clues: Roots of a Scientific Paradigm", *Theory & Society*, 7-3, 1979, pp. 273-288  
〔竹山博英訳「徴候——推論的範例の根源」『神話・寓意・徴候』せりか書房、1988年、177-226頁、歴史学文献レビュー⑦のギンズブルグの方法に関する説明も参照〕。

○「デジタル・ヒューマニティーズ」と「ビッグデータ」(pp. 19-22)

- ・多くの歴史家にとって、コンピュータや数字を利用することは、2000 年代半ばに広まった「デジタル・ヒューマニティーズ」や、ここ数年の「ビッグデータ」というフレーズに結びつくようになった。どちらも、1960 年代に起こったことに続く、第二、あるいは第三の波と呼ばれることがある。
- ・新しいアプローチの推進者たちにとって、このことが意味しているのは〔かつての〕「新しい歴史家」たちとモットーを共有しているということである。つまり、歴史学を「ハードサイエンス」のように機能させ、より多くの資金、より多くのチーム作業、より多くの客観性をもって歴史学を「再編成」することである。しかしながら、彼らによればその第一波はあまりにも早すぎた。より優れたコンピュータとデジタル化されたデータがある今こそ成功させることができるというわけである。
- ・〔「明日の歴史家はプログラマーになるか、存在しないかだ」と 1968 年に〕ル・ロウ＝ラデュリが書いてから 40 年後、プログラマーとしての歴史家が復活したのだ。しかしながら、人文科学の特質を見失うことなくコンピュータやデータの力を活用し、これまでとは異なることを行う機会として新しい波を捉える歴史家たちもいる。より優れたツールとより多くのデータがあるからといって、1970 年代以降に数量的歴史学に向けられた認識論的・政治的批判がすべて無効になったという確信を抱いている歴史家はほとんどいない。
- ・こうした歴史家の例外にあたるのが、デイヴィッド・アーミテージとジョー・グルディである。彼らの『歴史学のマニフェスト』<sup>7</sup>はメディアで多く取り上げられたが、専門家たちには大いに批判された。彼らは基本的に過去の分裂を復活させたのである。彼らは、文化的あるいは人文学的な歴史学や、アーカイブへの過度の注目に反対して、「大きな問い」を公共へのインパクト、「長期持続」、「ビッグデータ」、数量化と同化させた。
- ・数量的歴史学の新しい波が生み出したプロジェクトにはいくつかの落とし穴がある。潤沢な資金が投じられたプロジェクトが、例えば、古い芸術や文学のカノンをデジタルで分析することによって、歴史的に周縁化されてきたものを犠牲にし、既成の学問的ヒエラルキーを再生産してしまう傾向がある。
- ・コンピュータ科学者と歴史家のコミュニケーションが不十分だと、後者が「ブラックボックス」を扱うことになったり、前者がナイーブな科学主義や誤った厳密さを助長したり、あるいは質的な分析や、歴史家にとって重要な方法、問いを退けてしまったりする可能性がある。また、助手と研究者との間の分業が満足のいくものでなかったり、ビッグデータのデジタル分析に必要な形式と、歴史学の成果の学術出版に必要な形式に矛盾が生じるなど、もっと日常的な幻滅の原因もある。おそらくもっと重要なのは、〔数

---

<sup>7</sup> Jo Guldi and David Armitage, *The History Manifesto*, Cambridge: Cambridge University Press, 2014〔平田雅博・細川道久訳『これが歴史だ!——21 世紀の歴史学宣言』刀水書房、2017 年〕。

量的研究の〕見返りが減少して、印象的な資料が自明なことをよりよく示すために費やされていることである。

- ・ストーンはすでに、大学院生の心境をつぎのように述べている。「ひとつの明確な結論は間違いなく次の通りだ。つまり、手作業でサンプルを収集することが可能であるときは、一個の機械に宇宙全体を投じることよりも、いつも、好ましく早く、そしてちょうど同じくらい信頼できるのである」<sup>8</sup>。こうした結論は研究費の枯渇と相まって、1980年代に数量化の第一波の終焉をもたらした。
- ・2000年代以降、「デジタル」や「ビッグ」なものを対象とした国家や欧州による助成金が急増し、データをインプットする臨時の人員を大量に雇うようになった。こうした実践には古い轍を踏ませる危険がある。
- ・多くの「デジタルな歴史家」は、前世代のコンピュータに助けられた歴史学の落とし穴を避けようと努めている。彼らはデータとソフトウェアのオープンフォーマット化や、データと出版物のオープンアクセス化を支持している。第一波のデータの多くは、技術的な理由やデータが広まらなかったために失われてしまったのだった。
- ・しかし、オープンフォーマットとオープンアクセスは、デジタル化されたデータの耐久性を保証するものではない。例えば、大西洋奴隷貿易データベース「Voyages」は、非常にコストがかかることがわかっている。このプロジェクトのチームは、最新の技術を維持するのに必要な新しい資金のために、絶えず戦わなければならないのである。
- ・図書館や民間企業による大量の資料のデジタル化は、歴史学の慣習を確実に変化させた。注目に値するのは、こうした変化にも関わらず、この20年間、ほとんどの歴史家はデータベースや数量化の利用を刷新しなかったことである。利用可能な資料の数量が増えただけで、数えたり相関させたりすることが促されることはなかった。本書〔*Quantitative Methods in the Humanities: An Introduction*〕がその一助となることを願う。
- ・「デジタルヒューマニスト」たちが指摘するように、データはラテン語で「与えられたもの」(given)を意味するが、デジタル化されたデータでさえも「与えられたもの」と見なすことはできない。データの代わりに、能動的に「取られた」(taken)情報であるカプタ(capta)について話すべきである<sup>9</sup>。これはただの屁理屈ではない。データが「取られた」という事実が、人文学者（および歴史家）にとってそのデータを解釈可能で興味深いものになっているのである。ウェブ上で見つけられたデータは、検索するのは容易でも、資料として批判するのはより困難かもしれない。しかし、資料批判と数量化の基本的な原則は同じである。網羅的な「ビッグデータ」の収集を支持する大きな主張が時々なされるが、サンプリングはしばしば賢明な選択肢であり続けている。

---

<sup>8</sup> Stone, op. cit. [引用は邦訳 178-179 頁より]。

<sup>9</sup> Johanna Drucker, “Humanities Approaches to Graphical Display”, *Digital Humanities Quarterly*, 5-1, 2011; Lisa Gitelman (ed.), “Raw Data” Is an Oxymoron, Cambridge, MA: MIT Press, 2013.

### ○徴候と実験(pp. 22-25)

- ・インターネットが数量化を根本的に変えたわけではなかった。むしろ、1970 年代以降の歴史学の発展がそれを変えたのである。イタリアのミクロストリアが新しいアプローチを生み出し、証拠と事実に関する新しい問いを投げかけた。彼らは、初期の数量的研究者の無味乾燥な実証主義に見られるような、データや資料に対する受動的アプローチを避けようとした。
- ・しかし、純正のポストモダニストのレトリックも、歴史学を言説的な表象の解釈に限定しようとする、ほとんどうまくいかなかった。このジレンマに対する解決策、そして歴史学が刺激的な学問であり続ける方法は、実験である。
- ・私たちは、データが与えられたものではないことを認め、想像力豊かな方法で資料に問いを投げかけなければならない。「研究の手続き自体をナラティブの本体に組み込む」<sup>10</sup>ことで、解釈のゲームのルールが明確になる。カルロ・ギンズブルグが実践したようなミクロストリアの「文化的」部門では、実験に数量化を含まなかったが、他のミクロストリアの歴史家たちは数量化を用いた。例えば、ジョヴァンニ・レーヴィは、ある村の土地の売買を体系的に調査し、土地の種類や面積だけではなく、当事者間の社会関係によって価格が大きく変動することを発見している。直感に反して、高い価格が支払われたのは親族間の取引の場合であった。それは売り手を助けるための方法だった。
- ・社会史に応用する場合、ミクロストリアは、諸規範の間の対立（あるいは矛盾する信念体系）に焦点を当てる。こうした対立が、諸個人に選択と交渉の機会を突きつけることになる。ミクロストリアは、構造社会史や文化人類学が許容するよりも、より多様な軌跡を強調するのである。こうした軌跡は、ローカルな「布置・図柄」(configuration)の結果である。ローカルはここでは、抽象的なものに肉付けする事例をただ与えてくれる場ではなく、体系的な実験の場である。
- ・したがって、1960 年代に多くの「新しい歴史家」たちが考えていたように、「ミクロ」なスケールは数量的なものとは対立するわけではない。数量化の原動力は、情報の密度と情報を体系的な仕方で扱うという決定であり、大衆や社会全体を直接扱うことではない。ここでのデータとは、一つの現象に関連する長く均質な系列によって構成されるものではない。むしろ、軌跡と相互作用が入り組んだものであり、そこでは形式化とスケールリングによってパターンを発見することができるのである。
- ・この点で、著者たちの数量的歴史学は、デジタル・ヒューマニティーズのあるバージョンに似ている。行為者を分類するために用いられるカテゴリーと、個人や小集団の戦略

---

<sup>10</sup> Giovanni Levi, "On Microhistory", in *New Perspectives on Historical Writing*, edited by Peter Burke, Cambridge: Polity Press, 1991, p. 106 [ジョヴァンニ・レーヴィ (谷口健治訳)「ミクロストリア」、谷川稔ほか訳『ニュー・ヒストリーの現在——歴史叙述の新しい展望』人文書院、1996 年、107-130 頁]。



の両方に注意を払いつつ、数を数える方法は他にもあるのである。

- ・例えば、デイヴィッド・サビアンが1998年に刊行した18-19世紀におけるドイツのネッカーハウゼン村に関するモノグラフ<sup>11</sup>は、歴史人口学から家族史へと移行している。人口学者が主に出生率や死亡率などの集計に関心を持つのに対して、家族史家は親族関係の構築や「家族」の集団行動を形成する「戦略」を理解しようとする。ドイツ、イギリス、フランス、アメリカの「新しい社会史」で訓練を積んだサビアンは、1970年代初頭にデータベースの構築に着手した。彼はネッカーハウゼン村に現存する資料を徹底的に調べ上げ、この一つの村を集中的に研究することで一般的な結論を導き出そうとした。階級横断的な姻戚関係の衰退と、女性の親族関係に基づく結婚の傾向が高まったことに関する彼の結論は、質的にも量的にも、他の著作を刺激することになった。
- ・ミクロストリアの影響を受けた社会史家たちは、ネットワーク分析、あるいは長期的な個人のデータを研究するために開発された計量経済学的方法によって、マイノリティ的な変種や個人の行為主体性を無視することなく、かなり一般的な結論を導き出せると考えている（特に本書の5章においてその例が紹介される）。
- ・「例外的な正規」(exceptional normal)は、もっとも広く引用されているミクロストリアのスローガンの一つであるとともに、もっとも頻繁に歪曲されているものの一つである。この概念は、原則的にすべてが興味深く、代表的なものであることを意味している。あるいは、平均や普通からかけ離れた個人を見ることで、何が規範だったのか、どのように規範が変化したのかを明らかにできるということを意味している。
- ・しかし、ある個人が例外的であるかどうかは、どのようにして知ることができるのだろうか。ときには、ギンズブルグの異端審問の記録を用いた研究のように、例外的で普通でないからこそ資料が存在することもある。
- ・しかしながら、ある個人の軌跡が、資料の中で多くの類似した個人を観察してきた研究者にとって驚くべきものであるために、その個人が例外的である場合もあるのである<sup>12</sup>。したがって、大量の軌跡を体系的に記述することで、多様性を記録し、例外的なケースを特定し、深く研究するためにそれらを選択することができる。
- ・数量的なデータは、既成の解釈を改良したり、新しい問いを立てたり、広いパターンを特定した後でより個別化した分析に進むことを可能にしてくれる。

### ○結論：研究手段の一つとしての「数えること」(pp. 25-27)

- ・「新しい歴史家」たちが慎重だったのは、歴史を書くときに例を証拠として用いたり、正確なデータの裏付けなしに、「しばしば」とか「一般的に」といった副詞を用いるこ

---

<sup>11</sup> David Warren Sabean, *Kinship in Neckarhausen, 1700-1870*, Cambridge: Cambridge University Press, 1998.

<sup>12</sup> Ivan Ermakoff, "Exceptional Cases: Epistemic Contributions and Normative Expectations", *European Journal of Sociology*, 55-2, 2014, pp. 223–43.

とに対してだった。フランスの歴史家ダニエル・ミロは、このようないい加減な実践を「擬似一質的な」(pseudo-qualitative)方法と呼んだ<sup>13</sup>。

- ・これまで見てきたように、数量的方法は、時には実践的な理由から、時には専門的な歴史学の基準を満たさない（アナクロニズムなカテゴリー）ために、あるいは重要な問題（行為主体性、例外）を扱うには適さないように見えたために批判されてきた。しかし、こうした批判が「擬似一質的な」ものへの回帰を正当化するわけではない。数量化の第一波への幻滅は不幸な分業を生み出してしまったのである。
- ・歴史家は経済史などの分野全体を放棄したため、多くの国で人文科学的アプローチと社会科学的アプローチのギャップが拡大した。ほとんどの歴史家は、数量化を異質なものと見なし、細部を議論せずに大まかな言葉でそれを否定したり賞賛したりしている。
- ・著者たちが主張するのは、数量化は他の研究方法の価値と同等だということである。歴史家は数量的方法を、経済の問題やマクロな問いを扱うとか、他の手段で立てた仮説の最終的な証明に使うといった特定の役割に限定してはならない。
- ・むしろ、本書で紹介する数量化はあらゆるタイプの史料に適用することが可能である。資料に含まれる普通ではない言葉遣いに注目し、例外的な相互作用を明らかにすることもできる。資料はカテゴリー化しようとする私たちの衝動にしばしば抵抗する。しかし、学問的な分析はカテゴリーを使用することに依拠しているのである。情報は行と列で表示することができ、歴史的な想像力を刺激し、厳密さを強めるような方法でカテゴリー化することができるのである。資料をこのように形式的、体系的に考察することは、確証というよりも直感を助けるのである。

---

<sup>13</sup> Daniel S. Milo, “La rencontre insolite mais édifiante du culturel et du quantitatif”, *Histoire & Mesure*, 2-2, 1987, pp. 7-37.